

# フィンランドの歴史教育における対ソ連外交の変遷 ～1950年代と現代の歴史教科書比較から～

政策学部 政策学科 国際関係コース

H130114 澤田侑子

## 目次

### 第1章 はじめに

### 第2章 フィンランドの歴史

- ・フィンランド史の展開とフィンランドの地理的状況
- ・スウェーデン統治時代
- ・ロシア統治時代（統治時代初期-自由化の時代-ロシア化政策時代-独立期）
- ・独立後の時代
- ・第二次世界大戦下の時代（冬戦争・継続戦争）
- ・戦後（パーシキヴィとケッコネンの外交政策）
- ・冷戦とポスト冷戦を貫く「北欧協力」
- ・冷戦終焉後の時代

### 第3章 「フィンランド化」と歴史教育・歴史教科書の先行研究

- 3-1 フィンランド化
- 3-2 外部介入による政治変動と国民統合：山尾（2014）による外部介入を受けた  
国家の事例
- 3-3 歴史教育の意義：小森（2015）による歴史教科書の比較分析
- 3-4 1970年代のフィンランド歴史教科書の研究：Soininen(2010)

### 第4章 フィンランドの歴史教育の特徴：歴史教科書記述と聞き取りから

- 4-1 1950年代の歴史教科書
- 4-2 現代の教科書
- 4-3 現代のフィンランド人が持つソ連に対する考え

### 第5章 おわりに

### 参考文献

## 第1章 はじめに

学校で行われる歴史教育の目的の一つとして国民に愛国心を抱かせ、社会の統合をはかるということがあげられる。フィンランドでは冷戦期において資本主義経済体制を維持しながら社会主義陣営に組み込まれるという特異な「フィンランド化」の歴史がある。また、フィンランドは地理上、東側のロシアからも西側のスウェーデンからも政治的な影響を受けやすい場所に位置しているということ、そして、「小国」であるという点で、影響を受けやすい環境にあったということが出来る。本卒業研究では「フィンランド化」の時代におけるロシア帝国およびソ連が歴史教科書のなかでどのように記述されており、冷戦後の現在において記述がどのように変化したのかを解明したい。その変化を捉えることで、対外関係の変化が国民教育に及ぼす影響についての知見が深まることになると考えている。

この目的を果たすため、本稿では以下のような議論を進める。続く第2章では、議論の前提となるフィンランドの歴史と対ソ連外交について概説する。第3章では、歴史教科書から民族教育を読み解いた先行研究を検討する。具体的には、「フィンランド化」の概念について、外部介入による国民統合を論じた山尾（2014）、歴史教育の意義・ナショナルアイデンティティを論じた小森（2015）、1970年代のフィンランドの歴史教科書について調査した Soininen（2010）について論じていく。第4章では、まずフィンランドの歴史教育で一般的に使われている歴史教科書に焦点を当て、1950年代と現在の教科書の比較を行い、事実の伝えられ方やソ連の記述にどのような変化があるのかについて分析していく。第二に、フィンランド人の立場から見た外交・ソ連に対するイメージ・歴史認識について聞き取り調査を行いたいと思う。最後に、「フィンランド化」という社会統合を阻害しかねない外国の影響が強い環境下での歴史教育についての暫定的な結論を下す。

## 第2章 フィンランドの歴史<sup>1</sup>

### フィンランド史の展開とフィンランドの地理的状况

フィンランドという地理的概念は国家が存在する前からあったもののスウェーデン、ロシアに長年統治されてきた歴史があり、フィンランドという国家的まとまりがいつ成立したかについてははっきりとした答えはないため、長年フィンランドの学界で議論されてきた。そ

---

<sup>1</sup>本節は、百瀬宏・石野裕子編著（2008）『フィンランドを知るための44章』の48-104頁を参照し記述した。読者の理解を助けるため、章末付録に年表を付した。

のため、フィンランド史では周辺諸国との比較によってフィンランドを位置付けようとする試みがなされてきた。たとえば、フィンランドでは自国を「東と西の間」と位置づけ、東と西の間で翻弄されてきた事実を強調してきた（石野 2008.48-49 頁）。

フィンランドは 13 世紀からスウェーデン王国の統治下に置かれ、大公国という名目で統治された。1809 年、スウェーデンとロシアの平和条約によって、フィンランドはスウェーデンからロシアに割譲され、ロシア帝国の大公国となった。そして、1917 年 12 月に独立。第二次世界大戦後、ソ連に敗北したフィンランドは、カレリア地峡をロシアへ割譲し、現在の国境が確定した。冷戦期フィンランド政府は対ソ友好外交路線を貫いた（石野 2008.50-52 頁）。

#### ロシア統治時代（統治時代初期-自由化の時代-ロシア化政策時代-独立期）

フィンランドがロシア帝国下の大公国となった後、ロシア帝国は、スウェーデン統治時代（12 世紀ごろ～1809 年）と変わらない自治権をフィンランドに与え、優遇した。それゆえ、1917 年の独立までに国家形態を整えたかのように見えるが、実際にはフィンランドの処遇はロシア皇帝が変わるたび大きく変化した。とくにロシア皇帝が 1880 年代からとった一連のフィンランドの干渉政策である「ロシア化」政策は、自治を大きく揺るがした。これを契機に自治の保障を求める運動を始め、独立への布石を打つことになったのである（石野 2008.58 頁）。

ロシア統治時代を「ロシア統治時代初期」「自由化の時代」「『ロシア化政策』時代」「独立期」と大きく 4 つに分けることが出来る。

1809 年から 1850 年までを「ロシア統治時代初期」とする。この時代では、スウェーデン時代からの政治機構をそのまま受け継ぐことが承認された。そのため政治的混乱は生じなかった。このような優遇政策は、フィンランド奪還を狙うスウェーデンへの牽制を意図しており、ロシア側が国際情勢を睥睨した結果であった（石野 2008.59 頁）。

次に「自由化の時代」が到来した。この時代は、1850 年代後半からロシア皇帝アレクサンドル 2 世がフィンランドのスウェーデン離れに期待をかけたため、フィンランドの政治機構や文化に対して寛容な態度を示すようになった時代である。1860 から 1870 年代にかけて、フィンランド独自の政治体制が整えられた。フィンランド語を従来の公用語であったスウェーデン語と対等な地位に引き上げる布告が出された他、1878 年には徴兵令が制定され、軍事的な制度も整えられたことで、経済的にもフィンランドはロシア本国とは異なる経済発展の道をたどった。貿易的にも発展していき、資本主義の確立にも貢献した。そして、

この時期人々の間に、フィンランド民族としてのアイデンティティも芽生え始め、スウェーデン統治時代から受け継いでいた文化運動が民族ロマン主義運動という形で花開いた（石野 2008.59-60 頁）。

次に『『ロシア化』政策時代』<sup>2</sup>である。この背景には、ヨーロッパの国際状況の変化にロシア帝国側が警戒を強めたことが存在する。そして辺境としてのフィンランドの防衛を強化するため政治変革に着手した。これにより、自治が大きく揺らいだが、その一方でフィンランドの国民形成を促進する作用を果たした。このころ「二月宣言」<sup>3</sup>やロシア語を公用語とする「言語宣言」など一方的に改変された。フィンランド側はこれらの措置を政治のみならず文化の変容を強いるものとして受け取った。この時期、フィンランド内部は、一致団結してロシア帝国の干渉政策に立ち向かったのではなく、内部で分裂し、その分裂は暴力的な対立にまで発展するほど深いものとなってしまった。二月宣言撤回後の 1905 年末からロシア側はフィンランドを刺激ない政策へ方針転換し、国会選挙が行われるなど政治体制が整えられていくかのようにみえた。しかし、1909 年からフィンランドの政治制度を改変するような強力な「ロシア化」政策が再び施行された。これによって、フィンランド在住のロシア人はフィンランド人と同等の権利をもつようになった（石野 2008.61-65 頁）。

1917 年独立を宣言した。しかし、内部ではすでに階級間の対立でフィンランド社会の分裂が生じており、さらに革命を望む赤衛隊とブルジョア政権側にいた白衛軍の間で衝突が生じ、内戦にまで発展した（石野 2008.66 頁）。

#### 独立後の時代

1917 年独立を宣言した直後のフィンランドは、内戦、ロシア領カレリアの義勇軍派遣、親独政権の樹立と君主制選択という一連の激動に直面した。これらに続く、ドイツの敗戦、共和国憲法の採択、国際連盟への加盟などをも含めた諸事実はフィンランドが直面した世界史的諸条件を色濃く反映していた。フィンランドでは、経済発展が西欧の後背地としてばかりでなく、ロシアを自己の後背地としても進んだ事実、スウェーデンの統治下に長くあったため、権力が集中しにくいなどの特徴をもつ政治文化を受け継いだ（百瀬 2008.67-68 頁）。

---

<sup>2</sup> 第一次ロシア化政策は 1899～1905 年、第二次ロシア化政策は 1909 年～1914 年を指す。

<sup>3</sup> 二月宣言とは、ロシア化政策でもっとも有名なもので、1889 年 2 月にフィンランド総督ポブリコフが議会を無視して勅令の形で発布したものである。この勅令は、フィンランドの軍事制度の改革にとどまらず大公国議会の機能無視をも意味しており、フィンランド側はこれに強く抵抗した（石野 2008.66 頁）。

最大の懸念であるソ連・ロシアとの関係は、1920年に結んだタルトゥ講和条約でひとまず安定した。しかし、ロシア政府が同条約で自治を認めることになっていたロシア領のカレリアのレポラ、ポラヤルヴィ両地方にソビエト制を敷いたことがフィンランドのナショナリズムを刺激し、特に学生層の間にドイツとの提携による東カレリア救出を鼓吹する学徒会の結成をし、これがソビエト政権のフィンランドに対する猜疑心を掻き立てるという悪循環に招来した（百瀬 2008.69 頁）。

1930年代後半には、政治と社会を民主化する動きが強まった。福祉国家への歩みが始まり、大学教育におけるスウェーデン語とフィンランド語の平等原理が確立した。対外政策においては、国際連盟の誠実な一員として日本やイタリアの対外侵略行為に対する制裁措置に参加してきた。フィンランドはソ連と不可侵条約を結び、正常な関係を保っていた。1935年にナチス・ドイツが成立し、西側周辺の諸小国を經由してソ連を侵略する悪夢に悩まされるソ連は、フィンランドに危惧を伝えていた。スターリンは、ヒトラーと不可侵条約を結び、その付属秘密議定書で両国の勢力圏について合意し、フィンランドをソ連の勢力圏に入れた（百瀬 2008.70-71 頁）。

#### 第二次大戦下の時代-冬戦争と継続戦争-

ナチス・ドイツがポーランドに攻め入り、イギリスとフランスがドイツに宣戦布告すると、ソ連はフィンランドに対し、東カレリアのレポラ、ポラヤルヴィの割譲を代償に、カレリア地峡の国境線の後退など領土の割譲およびフィンランド西南部のハンコ岬の基地としての租借を要求した。それに対し、フィンランドは実質的に拒否した。ソ連は、フィンランド側がリュティ首相の率いる新政府を立てて急遽和平交渉に踏み切ったのを全く無視した。そのため、フィンランド政府は戦うほかなかった。その後、休戦交渉がはじまったが、ソ連側の領土割譲要求は開戦以前とは比較にならないほど拡大していた。国際連盟は突如覚醒したかのように侵略を糾弾し、ソ連を除名する行為に出たものの、各国から義勇軍が送られる程度にとまっていた。1940年過酷な条件をのんでモスクワ講和条約に調印し、国民は半旗をあげてこの悲報を迎えた。これらの一連の出来事を冬戦争という。冬戦争終了後もフィンランドとソ連の間の緊張は続いた（百瀬 2008.72-78 頁）。

ナチス・ドイツの対ソ攻撃が始まると、フィンランド政府は進んで参戦することは避け、推移を見守った。そしてフィンランド諸都市に本格的な空襲をかけてきたのを逃さず、ソ連に対するフィンランド独自の防衛戦争に入ると宣言した。これを継続戦争という。その後、ドイツ軍が大敗したことから、戦争離脱を考えるようになり、アメリカやスウェーデンの幹

旋工作を通じてソ連側と接触、交渉を重ねたが、ソ連が事実上の無条件降伏を要求するなど折り合いがつかないままに1944年6月ソ連軍の大攻勢に直面した。フィンランド軍は、ドイツからの莫大な兵器・軍需物資をもちいてソ連軍の進攻を食い止め、新たに大統領に就任したマンネルヘイムの下で、9月19日ソ連と休戦条約を締結した（百瀬 2008.75-78 頁）。  
戦後フィンランド-パーシキヴィとケッコネンの外交政策-

休戦条約によってフィンランドは、領土内のドイツ軍の拘束ないし駆逐、3億ドルの戦争賠償支払い、十分の一の領土の割譲、ポルッカ岬の貸与、兵力の縮小、戦争犯罪人の処罰、政治犯の釈放、ファシズム団体の解散という義務を負わされた。ユホ・クスティ・パーシキヴィは、首相就任直度の独立記念日の式典で、ソ連との友好関係の確立がフィンランド外交の要諦であると国民に語りかけた。戦後フィンランド史の要路もいべき戦争責任裁判の問題が解決すると、フィンランドが連合国（実質的にはソ連）の管理下から国際社会に復帰できる見通しがつき、残る仕上げの事項は講話条約の締結ということになった（百瀬 2008.79-82 頁）。

米、英、ソ三国の強調に彩られていた状況が、米英対ソの対立という冷戦状況に移っていく過渡期が1946年にあった。国際社会に復帰したばかりのフィンランドがまず直面したのは、1947年初夏にアメリカが提起したマーシャルプランにいかに対応するかという点であった。冷戦が深まる中、フィンランドの参加をソ連が望まない意向が伝えられると、パーシキヴィはソ連の経済支援と引換に不参加を決定した。冷戦が進む中で、ソ連は内政が共産党主導に固まってきた東欧諸国と相補援助条約網を形成し、フィンランドとも同様の条約を結びたいと申し出た。しかし、国民世論は、強く反対していた。パーシキヴィは諸政党の合意に基づく代案を提出され、ソ連もこれを受け入れた。代案の内容は、フィンランドが列強間の紛争の外に立つという意思を確認した上で、「フィンランドが、あるいはフィンランドを經由してソ連がドイツまたはドイツに与した国に侵略された時は、独立国として義務に忠実なフィンランドは、陸、海、空の全軍をあげてフィンランド領土内でこれと戦う。その場合必要であればソ連の援助を受ける」という内容であった。この条約は、フィンランドを脅かしているソ連の安全を保障してやることによってソ連が持っている脅威感を取り除こうというものであった（百瀬 2008.82-86 頁）。

「冷戦」とともに始まったウルホ・ケッコネン政権は、ソ連によるフィンランドへの内政干渉への対応にその特色が見出せる。ソ連は、西ドイツの軍事力拡大に備える必要性から「霜夜事件」や「覚書危機」などフィンランドへの内政干渉を行うことでフィンランドを

傘下に置こうと試みた。この2つの事件とそれに対するフィンランドの対応をひとくくりにして「フィンランド化」<sup>4</sup>と揶揄する声がある。しかし、これらを通して、フィンランドは、ケッコネンらの外交努力によってソ連側の要求を巧みに回避したとも考えられる。また、フィンランド内部から消極的な中立政策ではなく、積極的な外交によって列強対立の圏外に身を置こうとする構想が出てきたことに注目すべきである。ケッコネンが度重なる国会内での批判にもかかわらず、長期にわたり大統領の座にとどまったのは、ケッコネンが親ソ友好路線を敷きつつ、ソ連のフィンランドへの影響を抑えてきた点が評価されたからだといえる（石野 2008.87-93 頁）。

#### 冷戦とポスト冷戦を貫く「北欧協力」-

他の北欧の中でもフィンランドは異なる歴史を持っている。もっとも大きな違いは、フィンランドがソ連との間に冷戦期に友好・協力・相互援助条約を結び、「西側」とは言えない状況にあったことである。北欧には、1951年に設置された北欧会議という地域的協力機構がある。法律・文化・経済・交通の分野で北欧協力を推進しようとする協力機構である。しかし、ソ連との関係を考慮し、フィンランドの参加が実現したのは1955年のことであった。これは、フィンランドがソ連との条約の期間を20年間延長すると同時にソ連の使用していたポルッカラ基地の返還が実現して、ソ連との関係が一定の安定を得たときである。北欧会議が推進した地域協力は、その実質的な内容だけではなく、フィンランドの対ソ外交においても「覚書危機」などで、1つの後ろ盾となった。しかし、フィンランドが北欧協力の成果を強く認識していることを示し、またその発展をはかったのは「冷戦」が終焉する過程においてであった。北欧協力の拡大は「冷戦」期に北欧各国との協力体制を築き、社会的につながっていることによって隣国ソ連との関係の悪化を切り抜けることができたというフィンランド自身の経験に拠っていると言える（大島 2008.94-97 頁）。

#### 冷戦終焉後の時代-ヨーロッパの中のフィンランド-

1991年のソ連の解体は、ソ連との関係を重要視してきたフィンランドにとってとりわけ大事件であり、フィンランド政府の政治方針の転換をうながした出来事でもあった。ソ連の解体が確実視されてきたなかでも、フィンランド政府は慎重な態度を取り続けてきたが、解体の知らせを受けた後の対応は素早く、1984年のソ連との友好条約を破棄し、翌年の1992年1月に軍事的条項を盛り込まない形の条約をロシアと調印した。経済の混乱に加え、フ

---

<sup>4</sup> 第3章1節で「フィンランド化」の概念について詳しく記述する。

フィンランドはソ連崩壊に伴って生じた不安を解消するため、EC の加盟および地域協力への道を選択し、1992 年には EC 加盟の意向を表明し、さらに NATO 協力委員会のオブザーバーおよび WEU（西欧同盟）のオブザーバーとなった。経済は徐々に回復したが、高い失業率は依然として残り、都市と地域との格差がさらに広がった。フィンランドは NATO の勢力拡大を懸念するロシアを刺激しないため、あくまで NATO に非加盟の立場を貫いた。NATO とは個別で「平和のためのパートナーシップ」協定に調印し、この協定の枠内で NATO と協力体制をとることを決定し、安全保障の軌道修正を進めた。WEU に対しては正式加盟を目指さないとの立場をとった。フィンランドは、歴史的経験を活用して、ロシアとヨーロッパを結ぶ架け橋としての役割を積極的に果たそうとした。EU の枠内での地域協力を目標とした構想は、ロシアをヨーロッパから孤立させないことにつながり、ひいてはフィンランドの安全保障にもつながると考えられていた(石野 2008.98-100 頁)。

フィンランドの外交路線も変革を迎えた。1994 年に大統領に就任したアハティサーリは、国際問題における調停に積極的に関与することが小国フィンランドの中立政策を維持することにつながるという考え、国際社会における平和外交路線を打ち出した。対ロシア外交については、先にあげたようにヨーロッパとの架け橋としての役割とは別に、未だ慎重な態度を見せている。歴代のフィンランド大統領はロシア外交戦術に乗らない姿勢を貫いていたため、フィンランドでは議論の机上にさえ乗らなかった。このような一連のロシア大統領による両国間の歴史への言及は、今後も歴史問題に絡めた外交が展開される可能性があることを示唆しているのではないか（石野 2008.100-104 頁）。

### 第 3 章 「フィンランド化」と歴史教育・歴史教科書の先行研究

ここまで、フィンランドの歴史および対ソ連外交の変遷について見てきた。上記の歴史叙述からは、フィンランドの地理上、そして小国であるということから生じる外交関係の難しさ、長年に渡り支配されてきたという歴史、その中でのフィンランド政府の葛藤を知ることができるだろう。次の節では、これらのことを踏まえ、「フィンランド化」という特異な歴史について、外部介入による政治への影響、そして支配されていた時代の歴史およびフィンランド化の歴史が、どのように歴史教育および歴史教科書に反映されているのかについて議論したい。その前提として、分析方法を中心にした他国事例の先行研究と 1970 年代のフィンランド歴史教科書・歴史教育を分析した研究を本章では検討する。

### 3-1 フィンランド化

冷戦時代のケッコネン政権でのソ連による内政干渉への対応が「フィンランド化」を考える上で重要となる。ソ連は軍事力拡大に備える必要性から、1958年の「霜夜事件」と1961年の「覚書危機」と呼ばれるような内政干渉を行うことで、フィンランドを傘下に置こうと試みた(石野 2008.87 頁)。

「霜夜事件」では、1958年の総選挙で人民民主同盟が第1党に躍り出たにもかかわらず、社会民主党のカール・A.ファージェルホルムが人民民主同盟を除いた諸党派の連合政権を樹立したことから始まった。ソ連は、フィンランド駐在のソ連大使を引き揚げさせ、通商交渉をも中断するなどの圧力を加えた。さらに、ドイツとデンマークがバルト海西岸で軍事協力を進めていることを理由として、友好・協力・相互援助条約に規定されている軍事協力を要求するなどフィンランド政府に脅しをかけた。これに対し、ファージェルホルム内閣が退陣し、農民同盟による新内閣が発足したため、満足したソ連は外交的圧力をとりやめた(石野 2008.88 頁)。

次の内政干渉である1961年の「覚書危機」が起こった背景にはベルリン危機が存在していた。ソ連は1961年10月30日にフィンランド政府に覚書を送り、NATOの反ソ連的な軍事活動が北欧へ影響を及ぼしているとして友好・協力・援助条約に基づく軍事協力を要求した。これに対し、ケッコネン大統領は、会談でソ連の要求はかえって北欧諸国の脅威となり、均衡・中立政策をも崩しことにもなると説得し、最終的にソ連はこの要求を取り下げ危機は回避された(石野 2008.89 頁)。

この二つの事件とそれに対するフィンランドの対応をひとくくりにして「フィンランド化」という。これは、冷戦時代に西ドイツや他の西欧諸国で使用された概念である。「フィンランドのようになること」という意味で、小国は内政上の決定権がなく、大国の意思を尊重しなくてはならないということを揶揄していったものであった(リント＝アホ 2011.394 頁)。

フィンランドは、戦後何十年も、東西の間で均衡を保ち、中立であることを明言してきた。しかし、フィンランドの中立は、国外では必ずしも信用されなかった。西側諸国は、フィンランドがソ連の言いなりだと考え、いっぽうソ連はフィンランドが西側諸国と親しすぎると考えていた。とくに、ドイツでは「フィンランド化」という概念が頻繁に使われ、フィンランドはソ連の言いなりであり、その他の西欧諸国もソ連に譲歩しすぎると同じ状況に陥

ると考えられていたのである<sup>5</sup>（リント＝アホ 2011. 394 頁）。

### 3-2 外部介入による政治変動と国民統合：山尾（2014）による外部介入を受けた国家の事例

イラクの事例を扱った山尾（2014）は、外国の介入によって生じた政治変動に注目し、それが国民統合政策にいかなる影響を及ぼしたのかという問題を明らかにしている。こうした問題を考える上で興味深いのは、政治変動が国際政治と密接に連動して生じた場合、国際政治の影響が国民統合政策にも及ぶ点である。したがって、ここでは、米国を中心とする外部介入（2003年のイラク戦争）によって政治変動が生じ、その後内戦でさらなる国民統合が必要となったイラクの旧体制と新体制を比較分析する。

2003年の政治変動を経て国民統合政策はどのように変化したのか。教科書比較分析からは次のように結論づけることができる。サッダーム・フセイン統治下の旧体制は、戦争や外敵といった脅威に対して、英雄的な指導者を核に祖国防衛を図る必要性を強調することによって、国民統合を進めていた。それを正当化し、国民統合のシンボルとなったのが、古代文明の末裔としてのネーションのプライドであった。これに対して、新体制は、旧独裁体制を克服して民主主義と自由を勝ち取ったという新たな国史をシンボルにして、祖国の歴史的連続性と愛国心を強調することによって国民統合を図った。そこにおいて、ナショナリズムを鼓舞しているのは、民主主義が担保する国民の平等である。したがって、革命政権による祖国防衛のための国民統合から、民主主義と平等に基づく国民統合へと変化した、これが本稿の答えである。

こうした変化に対して、政治変動をもたらした外部介入はいかなる影響を与えたのだろうか？分析から言えるのは、外部介入による体制転換が生じると、国民統合のシンボルが外部から持ち込まれる場合があるという点に他ならない。

紛争が広がった戦後イラクでは、国家と国民が分断する危険性があるなど、国民統合政策は不可欠であった。新体制に残されたのは、民主主義と自由を核にし、国民の平等をナショナリズムの原理として国民統合を進めるといふ政策のみであった。それを正当化するために「イラク人が民主主義と自由を勝ち取った」という新たな国史を創造することによって、ネーションにプライドを与える必要があった。したがって、外部介入という政治変動の経路

---

<sup>5</sup> 現代使われている歴史教科書であるリント＝アホ（2011）のなかで「フィンランド化」の概念が記述されている。

は、国民統合のシンボルに脱歴史的で外在的な要素を持ち込み、それを正当化するための国史の飛躍をもたらしたのである。

### 3-3 歴史教育の意義：小森（2015）による歴史教科書の比較分析

同様に、教科書比較の視座から、エストニアの歴史教育について分析した小森（2015）を検討する。小森によれば、グローバル化する世界において、歴史には、世界や他者についての知識を豊かにすることと同時に、国民的アイデンティティを高める役割が期待されている。そして、学校教育は、歴史的知の主要な伝達の間であるということができる。ソイサルによれば、教科書は公的に選ばれ、構成され、伝達される知識の表像であり、競合と合意の産物であるため、ナショナルな集合性とアイデンティティの公的な表像を解釈する際には欠くべからざるものである。

小森（2015）は分析にあたって、指針となるのは、教科書の性格は、そもそも当該国におけるディシプリンとして歴史の捉え方によって決まるのだと主張する。そして歴史の事象の描かれ方は、当該国の現時点での世界の中の位置付けと、そこから生じる過去の見方によって決まるというニコルズの指摘に注目する。ニコルズはこれを、視点と学習方法をマトリックスで説明している。記憶型の教科書では、視点は単一。他方、解釈型の教科書ではその叙述は「語り」の形式をとり、解釈型の場合は資料提示が教科書の基本的な役割になっていることが多いとされる。

ここでエストニアの歴史教育の背景について述べる。第一次世界大戦後、エストニアは短い独立を得る。そして独立達成後、国民史の枠内で歴史研究並びに歴史教育は進んだが、1940年にソ連に併合され独立を喪失したことにより中断された。そしてソ連併合後には、国民史の地位をソ連史が占めエストニア史は地方史ないし郷土史に「降格」された。そして第二次世界大戦後では、エストニア史教育のための適切な教科書がないことからエストニア史が教えられない時期もあったとされている。その後、学校教育改革などがされる中でエストニア人を国民として描く再国民化が行われた。

ここでポイントとなるのは、両大戦間期にはエストニアは民族的エストニア人が約9割を占める民族構成であったが、独立回復後では、人口流入などにより、61.5パーセントまで低下していた。ここで問題となるのは、エストニア人にとっては、ソ連時代の歴史教育は他者によって押し付けられたものであり、否定すべきものであったが、ロシア語系住民にとっては必ずしもそうではなかったこと、そして、エストニア人の歴史的語りの中で、まさに

ロシアないしロシア人が他者として描かれていることである。したがって、ロシア語系住民の「国民化」と同時にエストニア人にとっても、ヨーロッパへの統合過程においてはロシア語系住民を含めた「国民」の再定義が求められることになった。

EUの加盟過程において、民主化・市場化に向けて多面的な改革が行われた。少数民族を含めたマイノリティの扱い・ホロコースト教育・ヨーロッパ像の構築である。教科書は、マスメディアにおける表象などとともに大衆向けの語りとして社会に大きな影響力を発揮し、それゆえ「他者」の包摂ならびに排除に特に意味を持っていることが指摘されている。ホロコースト教育については、冷戦期これらの諸国においては、第二次世界大戦における被害はユダヤ人に限らず、人民大衆全体が被ったものであるという公式認識があった。他方、冷戦終焉後は、これらの諸国では共産主義体制下で自民族が被った被害に関する語りが中心となり、ユダヤ人の被害についての語りは周辺化された。これに対し、ヨーロッパ史像の構築は、旧東欧・ソ連諸国の経験の、ヨーロッパ史への書き込みが要求される場であった。すなわち英・米・ソ連民主主義陣営対ドイツを中心とするファシズム陣営という局面ごとの複雑さを捨象し、ある種単純化された戦争の構図に対し、旧東欧・ソ連諸国の経験から構図の書き換えの必要が突きつけられた。

以上のように、本稿が扱うエストニアの歴史教育は、国内・国際政治の両方から直接影響を受けるものであり、また、教科書執筆者・教員・教育科学省・歴史家・社会学など直接的・間接的関係者もそのことを十分に意識している。小森（2015）が主張するように、エストニアもフィンランドの教科書もナショナルな語りで、記憶型である。たとえば、主語が「バルト諸国」となっているにもかかわらず、トランスナショナルな視点からの語りにはなっていない。エストニアの教科書で語られる「ペレストロイカ」はあくまで、エストニアの立場からの「ペレストロイカ」なのである。同様に、フィンランドの教科書でもフィンランド版「ペレストロイカ」について語られている。しかし、フィンランドの教科書では單元ごとに知識の確認とまとめに加え、多様な歴史解釈の提示ならびに歴史文書の比較が課題として挿入されている。すなわち、ある時代や出来事についてさまざまな見方があることが強調されている。そして本文では特定の語りの中核となっているが、章末ごとの課題では発展学習のための材料が提示されておりその部分は解釈型になっている。すなわち、記憶型と解釈型の混合とも言える。

そもそも、どのような歴史を学校という場において教えるかについて多文化主義的であること、またステレオタイプを避けることなどといった原則はあっても、ナショナルな歴史叙述か、トランスナショナルな歴史叙述かといった点についてヨーロッパレベルで合意が

あるわけでない。歴史教育を通しての和解や歴史認識共有のモデルケースとして語られがちなヨーロッパであるが、それはヨーロッパのほんの一部の経験にすぎない。

### 3-4 1970年代のフィンランド歴史教科書の研究：(Soininen 2010)

ここでは、ソ連の影響を最も受けていたとされている1970年代の歴史教科書の分析を行った Soininen(2010)の議論を検討する。調査の目的は、1970年代に出版され広範囲で使われていた教科書で、フィンランド化がどのような影響を及ぼしたのかについて明らかにすることである。この研究では、ロシアとソ連の1917年の革命の描写およびその後数年間の記述を明らかにしている。また、歴史教科書の歴史解釈におけるソ連共産党の公的な路線にどれほど沿っていたのか、そしてアメリカの描写について、現代の歴史教科書との比較を行っている。

フィンランドの歴史は、第2章の記述からもわかるように、隣接するロシアという超大国など外国の影響を大きく受けてきている。1917年にロシアの支配から独立すると宣言したフィンランドであったが、第二次世界大戦後もロシアはフィンランドの政治に大きく影響を与えた。独立を保つ際、独立と民主主義と自由市場経済を維持しながらも、外交政策はソ連の直接あるいは要求に従うような外交政策決定が採用する「フィンランド化」の状態であった。

1970年代の教科書の著者は、外交政策の要件を記述するにあたって、深刻な左翼の圧力下にあった。教科書は、国家権力とフィンランドの国家教育評議会(FNBE)による承認過程を通して国家の統制下にあり、教科書に使用される資料には、ソ連の専門家の記述がしばしば使われた。教科書執筆のための参考資料の中には、ソ連の科学アカデミーのメンバーによって企画されているシリーズも存在した(Soininen2010,4.)。

ロシアを描写した以前の研究によると、始めから終わりまで歴史の記述は否定的で、あくまでもフィンランドとは、別の国家であるということに焦点を当てている。確かに、ロシアは異なる言葉、地域、政府、政治的イデオロギーで敵として見られてきた。これは著しく、ヨーロッパにおけるロシアのイメージに似ていて、そしてフィンランドのナショナルアイデンティティを形成する上で機能している。

教科書というものは伝統的に保守的な編集方針であり、社会の中の変化にゆっくり対応すると考えられている。Janne Holmen は、教科書の中での変化を明確にしている。それは、1940年代における過去の反ロシアとナショナリスト的な内容が取り除かれていること。し

かるに、1970年代からさらに先では、1991年のソ連崩壊まで非常に肯定的だったということである（Soininen2010,11.）。

それに対し、Soininen(2010)はこの時期におけるアメリカの記述を研究したホルメンの成果を引用し、フィンランドの教科書は人種差別や環境問題を強調しており、かつベトナム戦争を批判していると記述している（Soininen2010,11.）。しかし、東ヨーロッパの発展に対する批判や、第二次世界大戦後のソ連に関する批判はほとんど見られなかった。教科書の内容の調査によると、ソ連に対する批判は、ある程度までソ連の歴史学に従い行われている。その一方で、フィンランド人にとって大きな価値ないし重要性がある出来事だとは必ずしも言う事が出来ない冬戦争でのフィンランド人の英雄的な記述やモロトフ・リッベントロフ協定<sup>6</sup>の存在を認知している内容を含んだ記述がある。この協定の記述は、ソ連がフィンランド政府に対して除去を要求したが、フィンランドはそれを拒んだ。それゆえ、いつでも無条件にソ連の公的な路線に沿っているというわけでないという事ができる。特に冬戦争の始まりは、いくつかの本によって正当化されているものが見られる。

1970年代のフィンランドの教科書では、ロシアおよびソ連の卓越した軍事力および国の大きさを強調する事によって、同様の正当化がなされている。ロシアを難攻不落で、ヒトラーやナポレオンのような偉大な軍事的リーダーの究極の継承者として描いている。

フィンランドの政治的状況は、政策を行う上で東西のバランスに常に気をつけることに焦点があてられた。そして、教科書の著者も似たような路線を取り入れていたといえる。安全保障やソビエト社会主義共和国連邦、そしてロシアを最高の軍事力として強調し、政治を正当化しているのである。

この研究の問題点として、この論文では、フィンランド化の影響が1970年代に一番強かったとされているが、なぜそう考えられるのかの根拠が明確でないことが挙げられる。そのため、本稿では比較対象として1950年代の教科書でロシアおよびソビエト連邦がどのように扱われているのかを検討してみたい。1950年代のフィンランド歴史教科書の分析は本邦初の学問的試みであり、本稿の重要な特徴である。

---

<sup>6</sup> 独ソ不可侵条約をさす。冬戦争の領土割譲要求などは、この秘密否定書によって行われたとされている。

## 第4章 フィンランドの歴史教育の特徴：歴史教科書記述と聞き取りから

### 4-1 1950年代の教科書<sup>7</sup>

1950年代のフィンランドの歴史教科書には2つの大きな特徴がある。ひとつは現代の教科書で記述される冬戦争の記述がまだ含まれていないこと。もうひとつはソ連の記述が今日的観点から見ても客観的なことである。

1950年代の歴史教科書において、ソ連およびロシアの記述は極めて客観的であり、事実が正確に記述されているということが出来る。それは、「レーニンの死後、スターリンが秘密警察やスパイを使って、不満や批判を完全に封じ込めていた」（MANTERE-G.SARVA1952,443.）という記述や、「極端な共産主義を推し進めていた」、「多くの人が飢餓で苦しんだ」という当局の政治的あるいは政策遂行上の未熟さからくる悲惨な様子を正確に記述していることから判断することは出来る。1970年代の教科書で認められたスターリン批判の記述は、ソ連の見解に沿って記述されたものであった。しかし、1950年代の教科書は、ソ連でスターリン批判が出される以前に出版されている。このため、1950年代当時のフィンランドの歴史教科書は、事実を客観的に伝え、ソ連を批判するような記述もあることがわかる。

また、1950年代のソ連の歴史教科書において、同様の記述がされたとするならば、スターリン統治下のソ連国内においては処罰の対象になると考えられる。よってソ連の影響が強まり始めたフィンランドにおいて、このような記述が政府機関の認可を受けて学校で教育されるということはきわめて興味深い。言い換えるとこのような記述が歴史教科書の一部であったということは、歴史教科書の編纂過程において、ソ連の外部介入の影響がまだそこまで強くなかったということができる。

一方、ロシア化政策の記述に関して述べると、現代の歴史教科書とは大きく異なる部分が見られなかった。あえて違う部分をあげるとしたら、「ロシア化政策の目的はフィンランドの政治的地位を根絶するためであった」（MANTERE-G.SARVA1952,340.）という記述や、ロシア化政策を「違法行為」であるということが、現代の教科書と比較すると強調されている点である。1950年代の教科書において、ロシア化政策での違法行為は二月宣言だけでは

---

<sup>7</sup> 本節は、K.O.LINDEQVIST(1953) *Uuden ajan historian oppikirja* Porvoo:WSOY と O.MANTERE-G.SARVA(1952) *Historian oppikirja keskkouluille ii* Porvoo:WSOY を参照し、記述した。

なく、他の事項に対しても違法行為が行われていたことが述べられていた。この点は、スターリン批判と同様に歴史を客観的に、そして正確に伝えている。しかし、現代の教科書においても同様の記述は見られることから、ロシア化政策の記述に関して言えば、1950年代から現代において変わらぬ立場が取られているということがわかる。

本論6頁でも論じたように1950年代、フィンランドはマーシャルプランに入らないという選択をした。これは、東西のバランスを考えた上でのフィンランドの選択であり、既にソ連の影響を少なからず受けているとすることができるだろう。それにもかかわらず、1950年代当時の歴史教科書でソ連の批判ともなりうる記述があることに関して、教科書の記述内容に、歴史的事実が反映されるまでのタイムラグがあるためだと思われる。

#### 4-2 現代の教科書<sup>8</sup>

現代の教科書では、歴史は研究者たちによって色々な見方をされると同時に、一人ひとりの見方によってそれぞれの解釈がなされるものとされている。そして、この教科書では、出来事の原因と結果を伝えることに焦点が置かれ、同時に、多くの歴史上の事柄について、必ずしも正しいとも間違っているとも決められない、さまざまな解釈があることが示されている。

現代の教科書では、全体的にリベラルな立場が取られ、1970年代の教科書研究にあったようなソ連の影響を受けたと思われるような箇所や、ソ連に沿って書かれた記述、批判などが見られなかった。それは、ソ連の記述に限らず、全体を通して言えることで、歴史に対して事実を淡々と記述し、批判も肯定もすることはされていない。そして、1970年代には批判されていたアメリカおよびアメリカのベトナム戦争に対する批判などの記述もみられなかった。(Soininen2010,11.) また、フィンランド人にとって大切な歴史の一つである「冬戦争」の記述であるが、これは確かに、1970年代の教科書と同様に、世界史を学ぶ上ではそこまで重要ではないのにもかかわらず、多くの頁を裂いて語られていた。しかし、著者がインタビューしたフィンランド人が言うような、「冬戦争に勝った」という表現はされておらず、冬戦争でのフィンランド軍の活躍や「小国が優勢な敵に対していかに善戦しているのかに驚いた」(リントアホ 2011.302頁) という記述にとどまっている。そして、「冬戦争の

---

<sup>8</sup>本節は、フィンランドの歴史教育の中で広く使われている2003年に出版された *HISTORIAN TUULET 7-8* を翻訳したリントアホ(2011)を利用した。

驚異」として紹介していた。ここで興味深いのは、一般書籍であるハイキオ（2003）の冬戦争に関する記述では、「かろうじて生き残ったような状態」（ハイキオ 2003.24 頁）という記述があるなど、フィンランド側の苦労や冬戦争がソ連との駆け引きの中でなんとか独立を守り抜いたことが読み取れるように記述されていたことである。しかし、現代教科書の記述だけでは、ハイキオ（2003）にあったようなフィンランド側の葛藤を想像することができない。以上のことから、現代の教科書では 1970 年代の教科書ほど、「英雄的」に書かれてはいない。しかし、他の記述に比べ、冬戦争はポジティブな出来事として記述されているとわかる。

またフィンランド人にとって屈辱の歴史である「フィンランド化」の歴史について、現代の歴史教科書では軽く触れられる程度にとどまっていた。具体的には、社会主義陣営下におかれながらも、フィンランドは資本主義体制を維持していたという記述が書かれているだけで、「霜夜事件」や「覚書危機」などの具体的な出来事の記述はなく、なぜ、そのような体制になってしまったのかということの記載がなかった。「フィンランド化」という苦い歴史は伝えるが、表面的に伝えるだけであった。

この教科書では、自国史と世界史の関係がどのようにとらえられているのかに注目し、歴史の事実を学んだ上で生徒一人ひとりがどのように考え歴史に向き合うのかということをおおに大切にする教育方針であると言える。それは、各章の最後にある「問題」として生徒に問われている課題からも読み取ることができる。これらの点から、フィンランドの歴史教科書と歴史教育がことさら民族主義を駆り立てるものではなく、歴史学という学問に基盤を置いた冷静なものだと捉えることができるだろう。

#### 4-3 現代のフィンランド人が持つソ連に対する考え

この節は、龍谷大学に留学しているフィンランド人からの聞き取りをもとにして記述する。<sup>9</sup> はじめに、ソ連およびロシアに対するイメージについてである。一般的に、支配されていたという歴史から、フィンランド人にとってロシア人へ良いイメージを持つ人は少ないようだ。「Russä」というロシア人を軽蔑したような悪い言葉が存在し、ロシアを悪く言うことしばしばある。独立記念日の 12 月 6 日は、フィンランド人にとって大切な日であるが、特にこの日には、ロシア人に対して「国へ帰れ」などという人も存在するようだ。独立記念

---

<sup>9</sup> インタビューは、フィンランドから来た留学生（20 代女性）に、2016 年 11 月 22 日 18 時頃行った。

日は、フィンランドの独立と冬戦争<sup>10</sup>の「勝利」に対して、国民が祝う日である。これまでの記述からも分かるように、フィンランド人にとって冬戦争の歴史は、フィンランド人としてのアイデンティティを形成する上でなくてはならないものである。厳密にいうと、冬戦争の勝利というのは、フィンランドが独立を守り抜いたことを指す。それは、フィンランド語で「SISU」（精神）と言われ、フィンランド人のプライドとして、多くの人が大切にしている。

また、現代のフィンランドとロシアの関係を表すものとして、フィンランドではロシアとの関係を赤ずきんちゃんの物語に例える人がいるらしい。赤ずきんちゃんがフィンランドで、狼がロシアである。一般的に赤ずきんの物語では狼は悪者として描かれている。そして弱者を相手に権力を横暴するような意味でのアネグロードとしてフィンランドでは語られることがあるのだろう。このアネグドートはロシアから独立したフィンランドが、隣国をどのように見ているのか、そしてロシアとの対外関係には一定の緊張を持って眺めていることが伺え得る。

また、1970年代の教科書はソ連の記述が批判的でないことに対し、アメリカの記述には批判的な部分が見られるなどソ連の影響を大きく受けていることが指摘される一方、現代の教科書では事実を淡々と述べられていた。実際の授業でも、歴史の授業で先生は、アメリカのことだけでなくソ連のことも、悪く言うことも良く言うこともせず、歴史を淡々と述べるだけにとどまり、その後どう考えるかを生徒同士でディスカッションさせるという。そうして、自分なりの歴史に対する考えを形成する教育がされているとのことである。

---

<sup>10</sup> 冬戦争でフィンランドは、ソ連の侵略の企てへの抵抗には成功したものの、実際にはかろうじて生き残ったような状態であった。ソ連の国境見直しの要求に抵抗する決意で団結したフィンランド人に対してソ連は侵攻を開始した。ソ連の侵攻に立ち向かうために、国民が一致団結して立ち上がったことが、フィンランドの独立を守り、領土を保つことに成功した原因であろう。これは「冬戦争の精神」としてたびたび引き合いに出される。冬戦争は、フィンランドの歴史の中で、ただ一つの最も重要な団結の経験の象徴となっている。労働者たちの間では、愛国心が高まり、戦争は彼らの共産主義へのイデオロギー的な敵意を確固たるものにした(ハイキオ 2003.24 頁)。

## 第5章 おわりに

これまでの記述から、1950年代から現代において、ソ連及びロシアの扱われ方には、次のような変化があるということが言えるだろう。1950年代には、スターリン時代の国民大圧に対する客観的且つ正確な記述がされている。それは、記述の中にある「警察国家」という言葉や、餓えや当時の悲惨さが強調され書かれていることから指摘できる。また、フィンランド化の初期であるこの時代において、1950年代の教科書ではその影響がまだ反映されていない。そして、フルシチョフのスターリン批判がされる前の時代であるにも関わらず、ソ連に対して、事実を正確に記述しているという点においてはとても興味深い。

1970年代では、先行研究にもあったように、教科書の記述においてフルシチョフの「スターリン批判」を受けた記述があった。そして、アメリカやベトナム戦争の批判がされていた。その一方で、ソ連共産主義に対する記述はとても肯定的であり、ソ連の方針に沿った記述がされていた。こういう点で、Soininen(2010)の言うようにフィンランドの歴史教科書では、ソ連の顔色を伺い記述されていたと分析することができる。

そして現代の教科書では、史実が淡々とかかれ、歴史記述は、肯定的でも批判的でもないという価値観の留保がなされていた。そして、歴史の授業では、史実を教えられた上で、学生一人ひとりがどのように歴史と向き合い考えるのかということが重要視されていた。しかし、その一方で、「Russä」という言葉でロシア人を軽蔑するような風潮があるなど、決してロシアに対して良いイメージを持つ人が多いとは言えない。そして、独立記念日において冬戦争の勝利を祝い、冬戦争を英雄的なものだと認識している点で、教科書の記述や歴史教育と一般人の認識とは、大きなズレがあるということができる。

山尾(2014)で、外部介入による体制転換が生じると、国民統合のシンボルが外部から持ち込まれる場合があると記述があった。これまでの研究から、フィンランドにおいては冬戦争がこれにあたると考えることができる。「冬戦争の精神」や「冬戦争の驚異」を正当化することで、フィンランド人の愛国心を高める役割をなし、フィンランド人としてのアイデンティティの形成に大きな影響を与えた。そして、フィンランド化という外部介入から、民主主義と平等に基づく国民統合へと導いたと言える。

また、小森(2015)で扱われたエストニアの歴史教育と同様にフィンランドにおいても、ロシア史およびソ連史が教育の中で教えられることがあった。しかし、そのような経験がありながらも1950年代から現代の教科書で一貫して、ロシアは他国として扱われていた。その過程でフィンランドにおいても国民の再定義がなされてきたことが推測することができる。

る。そして、歴史教育は国内だけでなく国際政治の影響を大きく受けている。これらは、1950年代の教科書にあったソ連の歴史に正確なソ連の記述や批判的なものが1970年代の教科書においては、消されていたこと。そして、解釈型の教科書から、現代では記憶型の記述にかわっていることから言うことができる。そして、「フィンランド化」という社会統合を阻害しかねない外国の影響が強い環境下での歴史教育において、ソ連共産党の公的な路線によって行われるという変化を及ぼした。独立国家であるフィンランドの教科書の中で、他国の公的な路線に沿って記述されるということは、フィンランドにとってソ連の存在が極めて大きく、政治活動の中で大きな影響を及ぼしていたとすることができる。

最後に、教科書分析から、Soininen(2010)の研究で述べられていた1970年代の教科書においてフィンランド化の影響が最も顕著であったという記述が正しかったと考察することができた。フィンランド化が終わった後の時代においても、支配やソ連との関係の苦い経験から、フィンランドがソ連との友好関係や協力関係を重視し、隣国であるソ連との外交関係の悪化を事前に防ごうとした結果が以上のように歴史教育に影響を及ぼしたのはなのではないかと結論づける。

「グローバル化する世界において、歴史には、世界や他者についての知識を豊かにすることと同時に、国民的なアイデンティティを高める役割が期待されている」(小森 2015)とされている。しかし、現代、実際にフィンランドで行われている歴史教育では、基本的な国民的アイデンティティの形成に影響を与えるだけにとどまり、国民の認識は歴史教育とは異なっていた。これは、フィンランドだけに言えることではなく、日本やその他の国にも言えることである。今回は、フィンランドにおける1950年代から現代までの歴史教育の変化の研究の考察で終わってしまった、しかし、歴史教育の意義や歴史教育が国民の思想などにもどのような影響を与えているのかということについて、深く研究していくことで、より歴史教育についての理解が深まるだろう。

## 参考文献

- ・石野裕子 (2008) 「フィンランド史の展開と地理的状況との関係」 百瀬宏・石野裕子編著『フィンランドを知るための44章』明石書店、48-52頁。
- ・石野裕子 (2008) 「スウェーデン王国の東の辺境として」 百瀬宏・石野裕子編著『フィンランドを知るための44章』明石書店、53-57頁。

- ・石野裕子 (2008)「ロシアの支配と民族の目覚め」百瀬宏・石野裕子編著『フィンランドを知るための 44 章』明石書店、58-66 頁。
- ・百瀬宏 (2008)「独立フィンランドと小国の命運」百瀬宏・石野裕子編著『フィンランドを知るための 44 章』明石書店、67-71 頁。
- ・百瀬宏 (2008)「第二次世界大戦下のフィンランド」百瀬宏・石野裕子編著『フィンランドを知るための 44 章』明石書店、72-78 頁。
- ・百瀬宏 (2008)「現実に向き合った戦後フィンランド」百瀬宏・石野裕子編著『フィンランドを知るための 44 章』明石書店、79-86 頁。
- ・石野裕子 (2008)「われらはここに生きる」百瀬宏・石野裕子編著『フィンランドを知るための 44 章』明石書店、87-93 頁。
- ・大島美穂 (2008)「北欧とのきずな」百瀬宏・石野裕子編著『フィンランドを知るための 44 章』明石書店、94-97 頁。
- ・石野裕子 (2008)「冷戦終焉後のフィンランド」百瀬宏・石野裕子編著『フィンランドを知るための 44 章』明石書店、98-104 頁。
- ・デイヴィッド・カービー (2008)『フィンランドの歴史』明石書店。
- ・マルッティ・ハイキオ (2003)『フィンランド現代政治史』早稲田大学出版部。
- ・ハリ・リント=アホ、百瀬宏訳 (2011)『世界史のなかのフィンランドの歴史：フィンランドの中学校近現代史教科書』明石書店。
- ・百瀬宏・石野裕子編著 (2008)『フィンランドを知るための 44 章』明石書店。
- ・百瀬宏 (2011)『小国外交のリアリズム：戦後フィンランド 1944-1948』岩波書店。  
学校現代史教科書』明石書店。
- ・Juhana Aunesluoma(2008) *The Cold War and the Politics of History* Edita Publishing.
- ・K.O.LINDEQVIST(1953) *Uuden ajan historian oppikirja* Porvoo:WSOY.
- ・O.MANTERE-G.SARVA(1952) *Historian oppikirja keskikoululle ii* Porvoo:WSOY.
- ・小森宏美 (2015)「再国民化と脱国民化に直面するエストニアの歴史教育」『早稲田教育評論』第 29 巻第 1 号 151-165 ページ。
- ・山尾大 (2014)「外部介入による政治変動と国民統合」『国際政治』第 178 号 102-117 ページ。
- ・Susanna Soinen(2010)“What were the effects of Finlandisation on Finnish comprehensive school history textbook in the 1970?” *Historia Viksu-Kilpailutyö* : Kriata Siroa.

## 付録

### <対ソ連外交の変遷>

1808	フィンランド戦争	スウェーデン敗北したことで、ロシアにフィンランドを割譲される。
1809	ポルヴォー議会	ロシア配下としてのフィンランドの立場が承認され、内政についての自己決定権を得る。
1853-56	クリミア＝オーランド戦争 <sup>11</sup>	ロシア敗北。フィンランドの自治をさらに進める。
1899-1905	第一次ロシア化政策	ロシア語の使用のみが許され、ロシア語・ロシア史が学校の必修科目になる。軍隊は解体される。
1908-1914	第二次ロシア化政策	1912年に平等法が制定されるなど、第一次ロシア化政策に比べても厳しい状況に。
1917	フィンランド独立	ロシアは第一次世界大戦に敗北。その結果独立実現。
1939-40	冬戦争	ソ連はフィンランドを征服したが失敗
1941-44	継続戦争	冬戦争で失った領土を取り戻そうとした
1944-45	ラップランド戦争	ドイツ軍を追い出し、戦争終結
1947	パリ講和条約	ボルッカラを除いて独立を阻むものがなくなる。
1948	友好協力相互援助条約 <sup>12</sup>	共産主義陣営に組み込まれる
1958	霜夜事件	ソ連はフィンランドの新内閣に不満を抱き、両国間の通商交渉を中断すると脅してきた。
1961	覚書危機	軍事協力開始のための提案
※	「フィンランド化」	霜夜事件と覚書危機をまとめて呼ぶ。
1991	ソ連崩壊	崩壊により東西間のバランスを保つ必要性がなくなり、政治的に西側諸国に属するようになった。

<sup>11</sup> この戦争で、ロシアは敗北したが、フィンランド人が戦争に貢献したという忠誠に報いるべく、フィンランド語の地位を向上させるなどフィンランドの自治をさらにすすめるきっかけとなった。

<sup>12</sup> パーシキヴィが交渉した結果、パーシキヴィの意向を多く反映したものとなる。